
私立探偵物語

小南 入

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私立探偵物語

【Nコード】

N1110BA

【作者名】

小南 入

【あらすじ】

トイズを失い、ダメダメだと評価されたミルキイホームズに指導役が決まった。

『探偵』である彼女たちの指導役は『私立探偵』！？

この物語は探偵オペラミルキイホームズの二次創作です。

序章（前書き）

みなさん、はじめまして。

拙い小説ですが、ぜひ読んでみてください。

あとがきは本編とは全く関係ないことが書かれるかもしれません。

序章

警視庁内にある一室で、捜査員たちが慌ただしく動き回っていた。その中で二人、他の捜査員とは違い、妙に落ち着いている刑事と落ち込んでいる刑事が室内にある椅子に腰かけていた。

「すまない、俺の判断ミスだ…」

黒のスーツを着た刑事が、椅子に座り下を向いて考え事をしている紺色のスーツを着た刑事に謝った。

「いや、君のせいじゃないよ。これは僕が君を止めなかったせいだ」

それにといつて下を向いておいた顔を上げ、隣にいる刑事を見た。

「この責任は君がとるんじゃないやなくて責任は僕がとるんだから、君は気にしないでいい」

「だが…」

「それに、これは僕と君との約束だろ？」

確かに約束はしたが、それは単なる口約束でと言おうと思いはした。しかしこいつはそんなことではひかない奴だと思い、刑事は何も言わなかった。

「さて、これから忙しくなるぞ、陣内刑事」

陣内と呼ばれた刑事は顔を上げそうだなと呟いた。そんな陣内刑事を見かねたのか、君らしくないなど、陣内刑事を見ながらクスクス笑っていた。

「な、何がおかしいんだよ、桐山」

桐山と呼ばれた刑事はすまないと陣内刑事に謝った。

「失敗なんて、誰にでもあることだ。君だって何度も失敗を繰り返してきただろ？」

桐山はそう言って陣内刑事を励まそうとした。確かに、今まで何度も失敗をしてきたが、今回に限ってはその失敗はあってはならないものだった。

「落ち込むのはいつだってできるが、今は目の前の仕事を終わらせ

ることを考えることが先決のはずだろ？」

その一言によつて陣内刑事は少し心が救われたようだった。陣内刑事は両頬を二度叩き、気合を入れた。

「よしっ！やるか！」

立ち直つた陣内刑事を見て桐山は安心し、今後のことを彼に任せて大丈夫だなという確信を得た。そして二人は慌ただしく動き回る捜査員たちに指示を出し、的確な作業をこなしていった。

その数週間後、桐谷刑事は警視庁を去つた。今回の件の責任を取るといつかたちでの退職であつた。

それから五年後。

郊外にある富豪の屋敷の応接間に、家主の草加 直行とその妻の幹枝と息子の行雄、秘書の宮野治夫、使用人の前田、富谷、柿本の三人、地元警察の刑事とその部下三人。そして桐山が居た。

「以上の事から考えると、犯人はあなた以外あり得ないんですよ。

草加 直行さん

桐山は草加を見ながらそう言った。反論の余地がないのか、草加はその場で崩れ落ちた。幹枝と行雄は草加のそばによりそっていた。

草加が警察によって連行され、事件は解決した。

「ふうー…」

屋敷の外に出ると、桐山は大きく背伸びをした。事件を解決すると決まって桐山は外に出て背伸びをしていた。

「お疲れ様です、桐山さん」

そう言って話しかけてきたのは地元警察の安田という刑事だった。彼は桐山を送るためにここに残っていた。

「すみませんね、迷惑をおかけしてしまって」

桐山は安田刑事に頭を下げて言った。それを見た安田刑事はとんでもないと行って両手を振っていた。

「桐山さんが居てくれたおかげで、こうして早々に事件が解決したんですから」

本来なら殺人事件などに警察以外の人間が関わることや調べることが絶対にならないのだが、桐山だけは例外中の例外だった。

「そう思っていたら、嬉しいかぎりです」

「では、自宅までお送りします」

「わざわざありがとうございます」

桐山が自宅兼事務所であるビルに着いたところには、日はすでに暮れて月が顔を出していた。本当なら事件のあった屋敷からこのビルまで二時間はかからないのだが、少々事情があつて安田刑事が務める警察署に立ち寄り、様々な書類にサインをしなくてはいけなかったからだ。

ビルの階段を上るところにはポストがあり、そのポストの一つには一階にある飲食店のもの、そして桐山が経営する『私立探偵事務所』のものと自宅用のものがある。桐山はまず事務所のポストの中身を

確認した。

「おや？」

ポストには宛先も差出人も書かれていない白い封筒があった。おそらく秘密の依頼だろうと思い、それを手に取り、自宅用のポストの中身を確認した。自宅用には夕刊と広告チラシが少しと一通の手紙があった。

その手紙には『ホームズ探偵学院』とあった。

ホームズ探偵学院とは、イギリスに本部を置く国際探偵機構が運営している探偵になるための学校であり、少し特殊な学校として有名だ。そんなところからの手紙に不快感を覚えながらもそれを手に取り、自宅がある三階まで階段を登った。

軽い夕飯と風呂をすませ、届いた封筒と手紙を開封し、中の手紙を見た。

封筒の方にはやはり秘密の依頼だったらしく、封筒に入っていた手紙の最初に『このことは内密にしていたきたい』という一文が書かれていた。

その手紙を読み終えたところに、なぜ自分のところに『ホームズ探偵学院』から手紙がきた理由がわかり、『ホームズ探偵学院』からの手紙の内容がどういうものなのか想像がついた。

次に読み始めた『ホームズ探偵学院』からの手紙にはこう書かれていた。

『前略、桐山 直己様。今回このようなお手紙をお送りしたのは、貴方をお願いしたいことがあるからです…』

「なるほど、ねえ…」

手紙を読み終え、桐山は手紙と封筒を金庫の中にした。これは彼が常に行っている習慣だ。依頼や頼みごとを手紙なのでされた場合、その手紙を捨てずに大事に金庫にしまっておく。

しばらく忙しくなりそうだなと思いながら、桐山は明日の予定をカレンダーに自分にしかわからないように書き込み、部屋の電気を消し欠伸をしながら寝室に向かった。

カレンダーには『x月 日、午前十時にホームズ探偵学院』と書かれていた。

この封筒と手紙、そして数週間前の事件が大きな事件の始まりであった。

序章（後書き）

というわけで、いかがでしたでしょうか？

えっ？

シャーロック達が出ていないのはなぜかって？

それは序章だからです。序章なので出してはけません。

出てくるのは第一章からになりますので、それまでお待ちください。

なぜ『私立探偵』を主人公にしたのかというと、単なる思い付きです。

それ以上の事はここでは教えることができません。

一応、それがどうしてなのかを本編の方で書いて行く予定にしていますので…。

第一章 ホームズ探偵学院（前書き）

トイズとは

トイズとは一部の人間が持つ特殊な能力のことであり、一種の超能力である。トイズには念動力や五感強化、幻惑、肉体強化などあるがその数は把握されていない。

またトイズについて様々な国が研究しているが未だに解明されておらず、謎に包まれており、トイズ解明にはまだ時間がかかるそうだ。

現在解明していることは、トイズはトイズを持つ者同志との戦いにより、失うことがあるということだけだ。しかしそれが事実かどうか判明していない。

このトイズを使って悪事を働く者がいる。人はそれを『怪盗』と呼び、正義のためにトイズを用いる者を『探偵』と呼んでいる。

『探偵』は『怪盗』に比べて圧倒的に数が少なく、『怪盗』を捕まえることができないでいる。それを解決するため、20XX年に英に本部を置く国際探偵機構（通称IDO）が各国に探偵を育成する教育機関を建設した。

日本には全国にあるが、特に有名なのは『偵都ヨコハマ』と呼ばれる場所にある『ホームズ探偵学院』がそれであり、そこではトイズを持つ少年少女が日夜『探偵』になるための勉強をしている。

(「探偵教本」より抜粋)

第一章 ホームズ探偵学院

ホームズ探偵学院は桐山の住むところから電車を乗り継いで一時間半かかる場所にある。

再開発によって「横浜」は「偵都ヨコハマ」へと姿を変え、今では探偵都市となっており、そこには『探偵』を目指す少年少女が住み、そして『怪盗』がそこに居座っている。

「変わるものだな、横浜も」

電車から見える景色を見ながら一人そうつぶやいた。彼が子供だったころは「偵都ヨコハマ」と呼ばれておらず、まだ「横浜」と呼ばれていた。

昔の事を懐かしんでいると自分が降りる駅に到着した。ホームズ探偵学院はそこから歩いて三十分のところにある。

桐山がホームズ探偵学院の正門に近づくにつれ、その大きさがよくわかる。学院内には鉄筋コンクリートの校舎と木造の校舎、そして学生のためであるう西洋風の寮があった。

正門に着くと、校舎の方から一人の男性が歩いてきた。おそらくこの関係者だろう。

「桐山 直己様ですか？」

「そうですが、あなたは？」

桐山が作業着姿の男性にそう尋ねると、「ここで用務員兼料理長をしております、石流と申します」と丁寧に自己紹介をした。それを見た桐山は「桐山 直己です」と自己紹介した。

石流は桐山を見て申し訳なさそうな顔をしていた。なぜ石流がそのような顔をしたのか、それは桐山が左手に杖を持っていたからだ。

「連絡をしていただければお車を向かわせていましたのに……」

「大丈夫ですよ。最近足の調子も良くなってきましたし」

ですが、と言う石流を見かねて桐山は本題を切り出した。

「そろそろ向かわないと、アンリエットさんを怒らせてしまいます

よ？」

そうでしたといって申し訳なさそうな顔をして石流は言った。石流の案内でアンリエットという人物がいる生徒会長室まで向かうことになった。そこへ向かう途中、桐山はホームズ探偵学院のことを話していた。

「こちらの学院ではどのような勉強をなさっているのですか？」

「英語や国語といった一般科目もしておりますが、やはり探偵に必要な知識を教える科目、例えば犯人の追跡やプロファイリングなどをしております」

「なるほど、本格的ですね」

とはいうものの、教室や模擬演習などで習ったことなど、実践ではあまり通用しないことが多い。それならば実際に自分で体験し、学んだ方が早いとは絶対に口にしなかった。

「はい。みなさん探偵になるために日夜努力しております」

そんな話をしている間に、目的の場所である生徒会長室に到着した。

石流が生徒会長室の扉を叩くと、中から「どうぞ」という声が聞こえた。石流は失礼しますと言って扉を開け、桐山を室内に招き入れた。

室内に入るとそこにはアンリエットであろう青髪の少女と女の子が四人いて、四人の女の子は突然入ってきた桐山の事を見ていた。

「はじめまして、桐山さん」

「あなたがアンリエットさんですね？」

青髪の少女はそうですと微笑みながら言った。そんなアンリエットを見て、桐山は心の中で彼女はなかなかの食わせ者だなと思った。

「あゝ……」

ピンクの長髪の女の子が突然声を上げた。

「アンリエットさん、この人は？」

「この人はあなた達の指導役になれる、桐山 直己さんです」

「指導役って？」

今度は茶髪で短髪の女の子が聞いた。

「簡単に言えば、あなた達の新しい教官ってところかしら」

「そうなんですか…」

紫色の長髪の女の子が桐山に聞いた。

「そんなところかな？」

依頼内容は生徒に色々なことを教えてほしいとだけ書いてあり、実際に自分が生徒に何を教えていくのか、桐山はわからずにいた。

「そんなの必要ありませんわ！」

金髪で長髪の女の子が声を張り上げて言った。

「私たちは小林教官のもとでたくさん学びました！今の私たちに指導なんて必要ありません！」

「小林って言うと、あの小林オペラのことですか？」

近くにいた石流に桐山が訊くと、そうですと答えた。

それはすごいなと桐山は驚いていた。

それもそのはず、小林オペラは中学生ながらも探偵として活躍し、難事件を次々解決した「天才少年探偵」と呼ばれ、日本中にその名をとどろかせていたからだ。しかしある事件をきっかけに、探偵をやめたという話しを耳にしていたが、まさかここで教官をしているとは思ってもみなかった。

「しかし、ここ最近のあなたはダメダメですから仕方がないのですよ。コーデリア」

アンリエットの一言が効いたのか、コーデリアと呼ばれた女の子は反論できないのか、黙り込んでしまった。

それは成績なのかわからないが、おそらく自分が教えていくのはそうだったところなんだろうと桐山は思った反面、この場にいる全員のことを観察しながら、色々と思いを巡らせていた。

「なんだか、頼りなさそうだな」

ネロと呼ばれた茶髪の女の子はどこかつまらなさそうに桐山を見ていた。

「人は見かけで判断しちゃ、ダメ…」

「エルキュールの言うとおりですよ、ネロ」

エルキュールと呼ばれた黒髪の女の子は恥ずかしいのか顔を俯かせてしまった。

「ところで、桐山さんってどんな人なんですか？」

「いい質問ですね、シャーロック」

シャーロックと呼ばれたピンクの長髪の女の子は、そのどこがいい質問なのかわかっていないようだった。

「桐山さんがいったい何をしている人なのか、あなた達で推理して当ててみてください」

桐山さんにあなた達の実力を知ってもらうためですと、アンリエッ

トが言うと四人は驚いていたが、すぐにそんなの余裕だよと言った。

「では、5分で彼が何者なのかを当ててください。質問はいくらでもしてもかまいません」

スタートと言っている間にか手に持っていたストップウォッチをスタートさせていた。

「桐山さんって足が悪いんですか？」

左手に持っている杖を見ながらシャーロックが質問してきた。

「少しだけね。でも最近は良くなってきているよ」

「トイズが使えるの？」

今度はネロが質問してきた。おそらくこれは桐山が『探偵』かどうかを疑っているのだろう。

「僕はトイズが使えないんだよ」

この答えで彼女たちの答えから『探偵』というのはなくなったはずだと桐山は思った。

「どんなお仕事をなさっているんですか……?」

エリキュールは人見知りの気があるらしく、少し恥ずかしそうに質問してきた。

「そうだね、色んな仕事をしているよ」

これでかなり答えが減ってきただろう。自分ならここで答えが出ている。

「最後に聞きますが、収入はおいくらですか?」

かなり鋭い質問をしてきたのはコーデリアだった。この流れでその質問をするのはかなりいいのだが、それ以上の事は質問しないのかと桐山は思った。

「一応生活する分には困らない程度だね」

これで四人が思いつく答えは出ただろうかなと思いはしたが、それ

でも自分の正体、というよりも職業を導き出すのは無理だろう。

四人からの質問が終わり、四人はあれだこれだと相談していた。そんな四人を見ていた桐山にアンリエットが近づき、四人はどうかと尋ねてきた。

「強いて言うなら、少し詰めが甘い」

「なるほど、詰めが甘いですか」

「あれが本当にあの有名な四人なんですか？」

「そうですね、桐山さん」

アンリエットはそういうが、桐山はそうとは思えなかった。なぜなら聞くところによると彼女たち事件をたちまち解決するらしいが、今の彼女達からそんなことはみじんも感じなかった。しかしそれは早とちりだなと、それを否定した。

先入観だけで物事や人を判断するのはよくないことを、自分が一番よく知っているからだ。

「わかりました！」

残すところあと1分となったところで、シャーロックが手を上げた。

「では、彼の正体を教えてください」

桐山さんの正体はと、ここまでシャーロックが言った時だった。誰かの携帯のバイブの音が聞こえてきた。

「すみません、僕のです」

携帯を取り出し、ディスプレイを見た桐山はちよつと失礼と言って生徒会室を出て行った。それからしばらくして桐山がすみませんと謝って入ってきた。

咳払いをしながらアンリエットはシャーロックに続きをといった。

「桐山さんの正体は、推理小説の作家さんです！」

シャーロックは桐山を指さしながらそう言った。桐山はなぜそう考えたのか聞くと、シャーロック、ネロ、エルキュール、コーデリアの順に説明していった。

「まず私たちがそう考えたのは桐山さんが私たちの指導役になるからです。私たちの指導役になるのなら、それなりに推理力があると思っただからです」

「確かに。君たちの指導役になるにはある程度、推理力が必要だからね」

「ボクが桐山さんにトイズがないかと聞いたときに、あなたはトイズがないと言っていた。これは桐山さんが『探偵』ではないということを確認しているからね」

「うん、そうだね。『探偵』はトイズがないとなれないし、ライセンスも発行されないからね」

「それに、桐山さんは色んなお仕事をしておっしやっていますから……」

「なるほど、作家はほかの仕事をしながら小説を書いている場合があるからね」

「あと収入が生活に困らない程度だとおっしやっていました」

「ふむ…」

「以上のことから考え、桐山さんが推理小説の作家さんであると結論づけました！」

なかなかの推理力と発想力を持っている四人だと桐山は思っていたが、その反面、全ての可能性を考えて推理できていないと思っていた。しかし自分の職業が職業だから、今回の場合は仕方がない。そもそも『探偵』とはあまり関係がないのもあるだろうが。

なるほどとつぶやいている桐山に、アンリエットが聞いてきた。

「いかがですか、桐山さん。彼女たちは？」

「素人目ですが、なかなかですね」

桐山の言うことが当たり前だと言わんばかりに、四人は満足した顔だった。

「しかし、『探偵』としてはまだまだですね」

それを聞いた四人は驚き、桐山に向かって文句を言っていた。

「私たちのどこがまだまだなんですか!？」

「そつだよ！ボクたちのどこがまだまだなのさ!！」

「納得いきませんわ!？」

「みんな落ち着いて……」

そんな四人を見てやはりまだ子供だなと思ってしまった。しかし彼女たちだつていきなり正体のわからない人に自分達はまだまだだと言われれば、文句を言っても仕方がない。

「エルキュールの言うとおりです。三人とも、少しは落ち着きなさい」

アンリエットの一言で、さっきまで文句を言っていた三人は黙りこんでしまった。それを見てアンリエットは軽く咳払いした。

「ひとまず桐山さんの正体を教えなくてはいけませんね」

「桐山さんはいったい何者なんですか……？」

エルキュールからの質問にアンリエットが答えようとしたが、アンリエットより先に桐山が答えた。

「僕は『私立探偵』さ」

『私立探偵』、それはトイズを持たぬ者が名乗る探偵としての名称であり、『探偵』では扱わない浮気調査などを主に行い、稀に美術館などで防犯対策などを行っている。

「『私立探偵』？」

四人は始めてその言葉を聞いたのか、よくわかっていないようだった。それもそのはず、『探偵』を目指す彼女たちによって、『私立探偵』がなんなのかよくわからないものだ。

「簡単に言えば、君たちが目指す『探偵』は主に『怪盗』を捕まえるための職業で、『私立探偵』は『怪盗』を捕まえる職業じゃなくて、それ以外の事件を解決したり、事件を回避する対策を練る職業なんだ」

桐山の説明でもよく理解していないのか、そうなんですかとコーデ

リアが言った。

「でも、どうしてその『私立探偵』の桐山さんが『探偵』であるボク達の指導役になるの？」

ネロがアンリエットにそう尋ねた。ネロの言うとおり、『探偵』である彼女たちの指導役になぜ『私立探偵』である桐山が指導役になったのだらうか。指導役なら『私立探偵』ではなく、同じ『探偵』の方がいいのではないだらうか。

「その件に関してはIDO直々の判断で桐山さんに決めましたので、私にはわかりません。私が知っているのは桐山さんが『私立探偵』であること、そしてあなた達の指導役になることだけです」

IDO直々の判断であるということもあってか、ネロは何も言反論できなかつた。

そもそも、国際的機関であるIDOがなぜ自分の事を知っているのか不思議ではあったが、それはおいおいわかるだらうと桐山は思った。

「私たちの指導役になるのですしたら、それなりの実力を持っているんですよね？」

コーディネリアが桐山にそう尋ねると、桐山はある程度はと答えた。

そうだなと呟き、君たちがどういう人なのか当ててみようかと言い、桐山はコーディネリアを見ながら君から当ててみようかと言った。

「コーディネリア・グラウカです。コーディネリアで結構です」

「それじゃあ、コーディネリア。君は少し短気な部分がある上に少し早とちりしやすいんじゃないかな？ 『探偵』としては、それは治しておいた方がいいだろうね。そして君は何か、例えば合気道のような護身術をしているみたいだね。『探偵』になるなら、それくらいはしておいて損はないよ」

そういわれたコーディネリアはどうしてそんなことを知っているのかと呆然とし、ネロが当たっていると行って驚いていた。

「次に君」

「讓崎ネロだよ。ネロでいいよ、桐山さん」

「じゃあ、改めてネロ。君はよくお菓子をよく食べているみたいだね。『探偵』は頭を使うから糖分の摂取は実にいいことだよ。それと相手を疑うことはいいけど、度が過ぎると大変な目に合うよ。で、一言余計な事を口にするみたいだから、気を付けた方がいいね」

「な、何でそんなことまで……」

「次に君」

「エルキュール・バードンです……」

「じゃあ、エルキュール。君は実に知識豊富みたいだね。でも少し恥ずかしがり屋なところを直した方がいいよ。『探偵』は見ず知らずの人と仕事をすることが多いからね」

「は、はい……」

「最後に君」

「シャーロック・シエリンフォードです」

「シャーロック、君はかなり洞察力に長けているみたいだね。『探偵』としてはなかなかいいよ。でももう少し色々勉強しておいた方がいいかな？」

「す、すい…」

桐山はシャーロックたちに合った時から色々と注意を払ってきた。

例えばアンリエットが自分の事を説明しているとき、彼女達は一字一句聞き逃さないようにしていたこと。そして質問をした後に相談しているときの会話。そして観察。これらによってなし得ることができることなのだ。

「君達も経験を積みばこのくらい簡単だよ？」

桐山は笑って話すが、そこまでのことができるといってどれほど時間がかかるのか、四人には想像もできなかった。そんな四人にアンリエットは桐山が指導役になるが文句はもうないかと聞くと、四人は黙ってうなずいた。

「では、これで正式に桐山さんをあなた達、ミルキィホームズの指導役に任命します」

「短い間だけど、これからよろしくね」

こうして桐山は彼女達、ミルキィホームズの指導役に任命されたのだった。

第一章 ホームズ探偵学院（後書き）

というわけでようやくミルキィホームズが登場しました。

といってもあまり活躍はしていませんけどね。

さて、この第一章はアニメでいうとだいたい彼女たちが屋根裏部屋に移ってから二週間ばかりしたくらいの時期です。

ところで前書きにあるのは某百科事典に掲載されていた「トイズ」についての事柄を自分なりに解釈をしたものです。

次回から前書きにはこういったものを載せていく予定です。

別に読まれなくても本編とは全く関係なものなので、飛ばしてもらっても大丈夫です。

それではまた次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1110ba/>

私立探偵物語

2012年1月12日01時51分発行